

賢治が愛した『法華経』

大阪国際大学名誉教授
藤本 雅彦

はじめに

『法華経』、『サッドルマ・ブンドリーカ・ストラ』(正しい教えである白い蓮の花の経典)は、全二十八品で、その中、観世音菩薩普門品第二十五は『観音経』として独立している。

成立は、坂本幸男によれば、『維摩経』の後、「紀元前後頃」と推定されているが、中村元によれば1~2世紀とされる。

中国語への翻訳は、竺法護(敦煌の人 239-316)の『正法華経』(268)が最古だが、智顛、最澄、日蓮など、一般的には、鳩摩羅什(クマーラジーヴァ インド人の鳩摩炎と亀茲(クチャ) 国王の妹の子)が中国語訳した『妙法蓮華経』(406)が用いられる。

日本で最初に法華経に注目したのは、聖徳太子(574-622)の『法華義疏』で、法雲(467-529)の『法華義記』を参照している。法雲は、智蔵(458-552)、僧旻(467-527)と並ぶ、梁(502-557)の三大法師の一人で、仏教を広めた武帝(464-549)に尊崇された。なお、『法華義疏』『勝鬘経義疏』『維摩経義疏』を合わせて、三経義疏と呼ばれている。

『法華経』は、声聞(ブツダの声を聞いた人)と縁覚(ブツダの死後、縁があつて覚つた人)の二乗(カーヤ 乗り物)と、菩薩(修行者)の大乗の三乗を、一乗に統一することを説くものであり、智顛(天台大師 538-597)の五時八教(教相判釈 ブツダの教えを五つの時代、八つの教えに分類したもの)は、以下のように説いている。

1. 華嚴時 『華嚴経』(悟りを開いた直後なので、難解)
2. 阿含時 『阿含経』(初心者向け。『法句経』と並ぶ最古の仏典)
3. 方等時 『浄土三部経』(『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経])『勝鬘経』『維摩経』等
4. 般若時 『般若心経』(「般若」パンニャーは、知恵)
5. 法華涅槃時 『法華経』(最終・最高の教え)

中国の学問の伝統的方法は注疏学(本文の説明が注、注の説明が疏)という解釈学であるが、智顛は、この中国的文献学を仏典に当てはめた最初の人。この『法華経』を最高の教えとする考え方は、最澄(767-822)を通じて、日本に広がった。日蓮(1222-1282)の「南無妙法蓮華経」の唱題も、これに拠っている。

1. 偉大な父と愚かな息子

宮沢賢治が『法華経』の熱烈な信者であったことは、よく知られている。では彼は、『法華経』のどこに魅かれたのだろうか(以下は、『法華経』坂本幸男・岩本裕訳注 岩波文庫に拠る)。例えば、譬喩品第三は「火宅三車の譬」として知られるものだが、次のような話である。

舍利弗よ、例えば、ある国に大長者があり。年老いて莫大な財産を持っており、邸宅が広壮で使用人も多く、家は広く大きい。門は唯一つだけで、子どもが、五人、十人、あるいは二十人いたとしよう。そして、その家で、ある日突然、火災が起きた。

長者は邸宅が大火に包まれたのを見て一方ならず驚き、こう思った。私はこの門から安全に避難することができるけれども、子供らは火宅の中で遊びに耽っており、気付かず知らず、驚かず怖れてもいない。火が身近に迫って危険苦痛が切実になっているのに、厭う気持ちがなく、少しも避難しようとしていない。

そこで子供らに向つてこう告げた。

汝らのかねて望んでいたものは、得がたい稀有なるものだ。もしそれを手に入れておかなければ、後で後悔するにちがいない。そのような羊の車、鹿の車、牛の車など、今門の外におかれている。自由に乗り回したらよからう。それゆえ、子供たちよ、この火事場から急いで逃げ出すがよい。随意に欲しいものを取るがよいと。

子供らは、われ勝ちにと先を争つて火事場を出た。

このとき長者は、子供らが安全に出てきて、みな道の四辻の広場に坐り、もはや心配のなくなったのを見



て、安心して喜んだ。しかし子供らは、口々に父に向かって訴えた。

父上が先に約束せられた好きもの、羊車・鹿車・牛車、さあ早く頂きたいと思えます。

舍利弗よ、これを聞いた長者は、子供らの一人一人に同じ大きさの大きな車、大白牛車を与えた。立派な車を子供らに平等に与えたのは、この長者が莫大な財産を持ち、庫はどれも充満していたので、長者が次のように考えたためであった。すなわち、私の財産は限りがない。みじめな小さな車を子供らに与えるわけにはゆかぬ。どの子供もみな私の子であり、愛情に偏頗はない。私にはこのような七宝の大車が数え切れぬ程多くある。是非とも同じようにめいめいに与えねばならぬ。差別してはなるまい、と。

ここに登場する長者は、莫大な財産を持ち、子どもたち一人一人を愛する偉大な父である。それに比べて、子どもたちは、家が煩惱の炎で燃え盛っていることにも気づかずにいる愚か者である。

信解品第四は、「長者の譬」とされる章だが、ここでも、偉大な父と愚かな息子が描かれる。

そのとき、摩訶迦葉は詩偈をもって申し上げた。

私たちは今日、仏の御教えを聞いて、これほど嬉しいことはありません。仏は、仏弟子 声聞が仏となり得ると説かれました。無上の宝物が、求めないのに自然に得られたのです。譬えて申しますならば、幼稚で何も識らぬ子供が、父を捨てて家出をし、遠い他国へ行ったとします。子供は諸国を流浪して、五十余年を過ぎました。その父は心配して四方に尋ね探し、探し疲れて一つの町に住みつきました。邸宅を構えて財宝多く、交易することは他国にもゆきわたりました。常に王者にも愛せられ、一族の尊敬を集めていましたが、年老いるにつれて子供の身の上が忘れられず、やがて死なねばならぬが、愚かなわが子は、家を出てより五十年になる。庫の中の品々は将来いかにしたらよいかと、朝夕、そのことのみが悩みの種であった。

そのとき窮子は、衣食を求めて、村から村へ国から国へと転々し、衣食の得られる時もあれば得られぬ時もあつたので、飢にやせ衰え、体に瘡まで出来ていた。次第に廻り廻って父の住んでいる町に来り、賃仕事にやとわれながら遂に父の家まで来た。

そのとき長者は門内の帳の中で豪華な椅子につき、眷属にとりまかれ多くの者に護られていた。中には金銀宝物を計算したり、財産の出し入れや記録をしている者もある。窮子は、父の豪貴尊厳な様子を見て、国王か王に等しい方かと思ひ、驚いて、ここへ来たことを悔ひ、ひそかに思うには、自分もしいつまでもここに居るならば、強制して仕事をさせられるかもしれないと考え、窮子は、走って逃げ出した。

長者は、ただちに使者をやり、追いかけてつれ帰らせたが、窮子は驚き叫んで、もだえた末に地に倒れてしまった。この人は自分を捕えた。殺されるに相違ない。衣食のためとはいいいながら、何としてこのようなことになるのかと、思ったのだ。

長者は、子が愚かで気が小さく、自分の言葉を信ぜず、自分が父であることも信じないであろうと考え、方便として、今度は片目が見えず、足も不自由で、さも品位のなさそうな別の者をつかわして、掃除のために共にやとわれよう、倍して直を与えようと言わせた。窮子はそれを聞いて喜んで随い来り、邸宅の中の掃除にあたることになった。

長者は賢明に、次第に自由に出入りさせ、二十年間、家の中をとりしきらせ、金・銀・真珠・玻璃などの品々もその取扱いを教え、みな管理させた。

父は、子の心がようやく成長し大きくなったのを見て、財産を譲り渡そうと思い、親族・国王・大臣・刹利（バラモン、クシャトリーヤ、ヴァイシヤ、シュードラなどの人々）・居士（在家の信者）たちを集め、大勢の前で発表した。子供は、昔、自分が貧しく、志が下劣であったときのことを思い出し、今、父の所で珍宝や邸宅などあらゆる財物を手に入れたので、この上なく大喜びをしたということであった。

この譬の中にあるように、仏もまた同様で、私の小さな望みしかないのを知らしめし、汝ら仏になるということは、かつて説かれたことはありませんでした。（中略）

私どもが小乗をよろこぶ者であるのを知られているので、方便力をもって私どもの心を抑え調べて、その上で大智を教えられました。私どもは今日、これほど喜ばしいことはありません。夢にも思っていなかったものが、今、得られました。かの窮子が無量の宝を得たのと同じであります。

50年前に家出をした子どもが、ようやく発見されたが、大金持ちの子どもであると、いきなり告げたら、信じてもらえないかもしれないので、まずは掃除係として雇い「直」を払い（賃金労働や海外交易が盛んになったのは1～2世紀の頃であるため、中村元は『法華経』の成立を、その頃と推定している）、その後、徐々に家の財産の管理を行わせてから、自分の子であると公表した。子どもは多くの財物を手に入れ大いに喜んだという物語であるが、これもまた、慈悲深く賢明な父と、愚かな息子の物語である。賢治は、どのような思いを抱きながら、こうした章を読んでいたのであろうか。

賢治もまた、23歳の頃に東京に家出をしている。父が電信為替を送っても受け取らないため、心配した父が東京まで来て、その後、二人は伊勢・奈良・比叡山を旅行している。その費用は、当然、父が出したのであるだろうが、おそらく賢治は、そうしたことに対する父親への負い目を感じたであろうし、家出した窮子の話は、自身の姿に重なるものとして受け止められていたのではないだろうか。その負い目が、如来寿量品における歓喜の爆発を生み出すことにつながっているのではないだろうか。

2. まるでSF?

賢治は、如来寿量品に感激したが、私が初めて『法華経』を読んだとき、最も驚いたのは、見宝塔品第十二であった。

世尊が靈鷲山で説法しておられるとき、仏の前へ突然七宝の塔が現れた。それは種々の宝物に飾られた壮大なものであって、地から湧き出し、浮び上って空中に住まった。

十方の世界から釈迦仏の分身仏が無数に集って来られた後、いよいよ釈迦牟尼仏は宝塔を開かれることになった。世尊が右の指をもって七宝の塔の戸を開かれると、塔の中には多宝如来が禪定（ディーナ 三昧と同義）に入っておられるように、全身そのままの形で座につかれていますのが見られた。

やがて多宝仏は、空中の宝塔に在りながら、半座を分けて釈迦牟尼仏に勧め、ここに就かれるようにと言われた。釈迦仏はこの招きを受けて、塔の中に入り、その半座に坐せられた。

人々は、ここでわれらもともに虚空におらしめられたならばと、ひそかに心に思ったところ、釈迦仏はただちに大神通力をもって大衆を虚空の中に引き上げられた。そして、大音声をあげて、世尊はあまねく人々に告げられた。

この娑婆（サハー 大地）国土において、広く法華経を説こうとする者はいないか。今こそまさにその時がきた。如来はまもなく涅槃（ニルヴァーナ 火が消えた状態）に入るであろう。仏はこの法華経をその人に委嘱しておきたいと思う、と。

地面から、突然、出現し、空中に浮び上がる宝塔。十方世界から飛んで集まってくる、ブツダの分身たち。そして、ブツダ自身も空に浮かび上がり、塔の中に入り、瞑想する。それを眺めていた人々が、自分たちもこんなふうにならなあとと思うと、たちまちに何万、何十万もの聴衆のすべてが空に浮かび上がる。なんと劇的で、幻想的な光景だろうか。ところが、賢治が感動したのは、この章ではなかった。

3. 久遠実成

賢治が感動したのは、如来寿量品第十六であった。その章は、以下のような物語である。

善男子よ。釈迦牟尼仏が釈氏の家を出て、伽耶城において悟りを開いてから、無量無辺百千万億那由他劫という、長い時間が経過している。それは例えば、五百千万億那由他阿僧祇の三千大千世界をすりつぶして微塵にし、それをさらに、東方の五百千万億那由他阿僧祇の地に、一粒ずつ捨て続けてなくなるまでというほどの長い時間なのだ。善男子よ。私が若くして悟りを開いたと説いたり、悟りを開いてから久遠の時を経たと説いたりするのは、衆生を教化するための方便でしかない。私は実^{まこと}に成^{なり}仏して以来、久遠なのである（「久遠実成」）。

それは例えば、学識があつて賢明で、あらゆる病気の治療に優れた良医がいたとしよう。彼がたまたま外国に行っている間に、子どもたちが毒を飲み、悶え乱れ、地に宛転べり、苦しんでいた。戻って来た父親が作った薬を飲んだ子どもたちは治ったが、心が顛倒した子どもたちは、薬を飲もうとしない。そこで父親は、「私は老い衰えて、死期が近づいている。薬を作っておいたので、飲みたいものは、飲みなさい」と言いおいて他国へ出かけ、さらに、そこから「父は死んだ」との知らせを送った。待む者のいなくなった嘆きの中で、心が顛倒していた子どもたちも醒^め悟^りめ、ついに薬を飲んだ。善男子よ。この良医の虚妄の罪を説くことができるだろうか。

心が顛倒している衆生は、わが滅度を見て、広く舍利を供養し、ただ恋慕して渴仰の心を生じさせる。しかし、私は滅度したのではない。それは方便力なのだ。私は、滅・不滅を繰り返し、つねに人々の中にいる。そして、「何を以てか衆生をして無上道に入り、速やかに仏身を成就することを得せしめん」と念じ続けているのだ。

天台智顛は、法華経全体を迹門・本門の二部に分け、それぞれをさらに序分・正宗分・流通分に分類しているが、この章のみが、章の全体が本門の正宗分、法華経の一番重要な部分とされている。

それは、ここで「久遠実成」という重要なテーマが語られているからである。

ブツダが、若くして悟りを開いたと説いたり、悟りを開いてから久遠の時を経たと説いたりするのは、衆生

を教化するための方便でしかないとされる。この「方便」という言葉も非常に重要な考え方であり、例えば、良医が、子どもたちを救うために、外国へ出かけ、わざと死んだという知らせを送り、父を失った嘆きの中で、ようやく子どもたちが薬を飲んだと知ると、生きて戻って来たりしたように、ブッダにとって、生きていたり、死んでいたりすることは、方便でしかない。ブッダは、<いつでもどこでも誰にでも>、常にそこにいる。キリスト教において三位一体説が説かれ、神とイエスと聖霊が一体化するように、ブッダもまた、永遠な存在となって人々を救済する。

高野山金剛峯寺では、今も毎日、空海に食事を運び、比叡山延暦寺でも、毎日、最澄に付き従う僧が御籠りをしているが、二人にとっても、死は、一つの方便でしかない。四国八十八か所巡りの「同行二人」も同様であり、ブッダや、最澄や、空海にとって、生死は方便なのである。

賢治は、この章に「歓喜して身体がふるえて止まらなかった」（宮沢清六『兄のトランク』）と驚喜したそうだが、「久遠実成」に、人の死も方便でしかないとする世界に感動したのだろうか。具体的なことは分からないが、賢治は、ここで<永遠>に触れたのであろう。

また、「毎に自ら是の念を作す。何を以て衆生をして無上道に入り、速やかに仏身を成就することを得せしめん、と」というブッダの偈は、天皇が即位する際に、関白家から天子に奏上された重要な経文であり、そしてそれは、賢治自身の願いに通ずるものであった。さらに言えば、どのようにして人々に無上道に入り、幸せになってもらおうかと念じているブッダの姿に、あるいは、自分の死でさえ方便でしかないと考える境地に誰でも達し得ると保証する『法華経』に感動していたとも考えられる。いずれにせよ、賢治もまた、不滅となつてはいるのだが。

この章は、40 数年間しか修行していないのに、なぜ遙か昔からの、ガンジス川の砂の数より多い如来たちや、菩薩たちの父となることができるのかという、従地湧出品におけるマイトレーヤ（弥勒菩薩）の問いに対する、ブッダの回答である。

私が入滅した後も、この経（『法華経』）を護持し、読誦し、広く説けと世尊が語っていると、娑婆世界の

千大千の国土の地が震裂し、その中から、無量千万億の菩薩や摩訶薩が湧出した。その身は金色で、三十二の吉相と無量の光明を備えていた。世尊が「善哉、善哉。善男子よ、汝らは能く如来において随喜の心を起こした」と讃嘆すると、マイトレーヤが、「われ等は、昔より以来、かくの如き大菩薩・摩訶薩衆の、地より湧出して、世尊の前に住し、合掌し、供養して、如来を問訊したてまつるを見ず、聞かず」と、こんなにも多くの菩薩たちは、一体、どこから来たのだろうかという疑問を持った。それに対して、世尊は、「これらの求法者の数を測ることも、数える基準もない。私が、ガヤーの町の樹の下で悟りを得て、彼らを成熟させたのであり、彼らはすべて私の子どもなのだ」と語った。

マイトレーヤは、「世尊よ、如来は王子としてこの世に生まれながら、サーキヤ族の都カピラ=ヴァストゥを出られて、ガヤーの町からあまり遠くないところで悟りの頂上に上られたが、その期間は四十年余りでした。それは例えば、色美しく、髪黒い、二十五ほどの青年が、百歳の人を指して、これわが子なりと言い、言われた人も、これわが父なり、われを生育せりと言うようなものであり、世間の人は誰も信じないのではないのでしょうか。如来の言は虚妄ではないとされますが、どうぞ解説して、私の疑いを晴らしてください」と願った。

見宝塔品では、七宝の塔が地面から湧き出し、空に浮かび上がったが、ここでは、恒河沙（ガンジス川の砂）よりも多くの如来（悟りを開いた人）

や菩薩（修行者）が、地面から次々と湧き出してきて、空中に浮かび上がる。この章も劇的で幻想的。そして、彼らが生まれたのは、私が、ガヤーの菩提樹の下で悟りを開いたからであり、彼らはすべて私の子どもなのだブッダは言う。それに対して、マイトレーヤは、それではまるで、25 歳の青年が 100 歳の老人の親だと言い、言われた老人も、この若者が私の父だと言っているようなものではないかと問いかける。

マイトレーヤは、ここではブッダの説に反論する役割を課されているが、序品でも、彼はマンジュシュリー（文殊師利菩薩）の弟子で、「利益のみを貪り執着して、經典は読誦しても忘れるばかりで殆ど通曉することができなかつた。それゆえ人から求名（名利を求め者）と呼ばれた」



藤本 雅彦先生の講演風景

とされる求名菩薩として登場している。それはおそらく「久遠実成」を理解できず、ブッダは死んだ（常識的には、それが正しいのだが……）、だから56億7千万年後に悟りを開き人々を救済する仏が必要だとするグループの象徴としてマイトレーヤが存在していたからではないだろうか。

「久遠実成」であるならば、ブッダの後継者など必要がないのは、キリスト教において、イエス・キリストの二代目が必要ないと同様である。そこで『法華経』を作った人々から、割の悪い役割を与えられているのではないかと私には感じられる。

賢治は、如来寿命品に感動したと伝えられるが、その感動の中には、従地湧出品も含まれているのではないだろうか。賢治には、父に対する精神的・経済的な優しい目があるだけでなく、父を法華経信者に改宗させようとしても、うまくいかない日々が続いていた。しかし、25歳の青年が、100歳の老人の父であっても、少しも不思議ではないのであれば、自分と父との関係も、逆転しても少しも構わないと思ったのではないだろうか。



2018年宮沢賢治86回忌法要 献花・焼香風景（大講堂）

4. デクノボー

常不軽菩薩品第二十は、『雨ニモ負ケズ』の「デクノボー」のモデルではないかとされる菩薩が登場する章である。釈迦が、大勢至菩薩（阿弥陀如来の弟子）に話しかけた。

はるか昔、四十万億那由他の恒河沙の数ほどの劫の長さの間、正法の時代が続き、次に、四大洲を作る微塵の数ほどの劫の長さの間、像法（正法の模倣の教え）の時代が続いた。像法の時代の最後には、非常に優れた仏が現れ、また正法の時代が始まる。そうして、二万億の仏が次々に現れた時代に、常不軽と名づけられた一人の菩薩が現れた。彼は、出家した比丘・比丘尼や、在家の男・女の信者に会うたびに、「われ深く汝らを敬う。あえて軽しめ侮らず。所以は何。汝らは皆、菩薩の道を行じて、まさに仏と作ることを得べければなり」と声をかけた。しかし、四衆（カーストの人々）の中には、瞋恚を生じ、悪口し、罵る者もいて、虚妄の言を伝えるなど、杖木でたたいたり、瓦石を投げつける者もいた。それでも、常不軽菩薩は、「汝は、まさに仏と作るべし」と言い続けた。

この菩薩の死期が近づいた時、虚空から法華経の教えが響いてきて、六根清浄（眼耳鼻舌身意の清浄）を得ることができ、二百万億那由他歳の寿命を得て、法華経の教えを広めていった。やがて、彼を罵っていた人々も、みな彼に、信伏し、随従するようになった。

出会った人々のすべてに、あなたは仏になる、完全・完璧な人になれると言い続け、怒ったみんなから、杖でたたかれ、石を投げつけられても、あなたは仏になる、理想的な存在になると言い続けた常不軽菩薩は、デクノボーのモデルとされているが、『度十公園林』の度十にも通ずる存在であるだろう。

5. インド的矛盾

薬王菩薩本事（前世）品第二十三は、インド思想の特質を示す章である。

無量の恒河沙の数ほどの劫の昔、日月浄明徳如来という完全な悟りに達した如来が現れた。八十億の菩薩・魔訶薩と七十二恒河沙の声聞を引き連れ、寿命は、いづれも四万二千劫であった。彼らの国は、天上の瑠璃でできており、宝玉の樹木や梅檀で飾られ、木々の間には宝石の網が揺らぎ、宝石の布がひらめいていた。宝石でできた香炉から香り立ち、七宝でできた高樓の頂きでは、百億の諸天が、天の伎楽を演奏し、仏を歌い、供養をなしていた。その中で、一切衆生喜見菩薩が、法華経の偉大さを供養すると、虚空から、曼荼羅華や摩訶曼荼羅華、梅檀が降り注いだ。梅檀の価格は、六銖（数グラム）で娑婆世界に当たるほどのものであった。しかし、こうした供養を行なった後で、神通力をもって供養したところで、身をもって供養するには及ばないと考え、沈香や乳香、薫香などの樹脂を食べ続け、また香油を飲むこと、千二百歳に及んだ。そして、天の宝衣を身にまとい、諸々の香油を身に注いで、自ら身を燈した。その光明は、八十億恒河沙の数ほどの世界を照らしたが、千二百歳を過ぎると尽きてしまった。

一切衆生喜見菩薩は業の力によって、日月浄明徳如来の国に再び、輪廻転生した。しかし、日月浄明徳如来は滅度してしまつたため、梅檀を積み上げて火葬し、舍利を納める八万四千の宝瓶を作り、八万四千の塔を建てて供養した。しかし、それでも足りないと思い、自らの脇を焼いて供養した。その姿を見て、諸々の天・

人・阿修羅らが憂い^{かな}悩み^{かな}悲哀^{かな}しむと、もとの^{こんじき}金色の姿に戻ることができた。

この一切衆生喜見菩薩こそ、前世における薬王菩薩。だから、手の指、足の指の一本でも焼いて供養する者があれば、それは、どんな宝物を供養するよりも優れている。

法華経は（以下「十喩」とされる）、一切江河の中で海が第一であり、山々の中で須弥山が第一であり、衆星の中で月天子が第一であり、日天子の闇を照らすように、諸王の中で転輪聖王が第一であり、三十三天の中の帝釈天のように、大梵天が一切衆生の父であるように、一切凡夫の中では阿羅漢・辟支仏（縁覚）が一番であり、声聞・辟支仏の中では菩薩が一番であり、仏が諸法の王であるように、法華経もまた、諸経の中の王なのである。

法華経こそ、一切衆生を救うものであり、一切衆生をして、諸々の苦悩から離れさせるものである。一切の願いを満たすこと、清涼な池が渴いた者を満たし、寒がっている者が火を得、裸の者が衣を得、商人が主を得、子どもが母を得、渡りに船を得、病に医者を得、暗闇に燈火を得、貧者が宝を得、民が王を得、河川が海を得るように、法華経もまた、その通りである。

『銀河鉄道の夜』では、「みんなの幸のためならば僕の中からだんか百ぺん^さ灼いてもかまはない」とジョバンニは言う。かつてのベトナム戦争時には、南ベトナムの僧侶がガソリンをかぶって焼身自殺して抗議するという出来事が多発し、また、ブッダに最後まで随行したアーナンダ（阿難）も、自身が引き継いだ教団が分裂し、どちらの人々からの誘いも断り切れず、ついにガンジス川に船を浮かべ、その上で焼身自殺したと伝えられている。

焼身自殺ではないが、ブッダも、ジャータカ（釈迦本生譚）で、薩埵王子であった時、飢えた虎の親子のために崖から身を投げて与えたと伝えられ、その姿は、法隆寺の玉虫厨子に「捨身飼虎図」として描かれている。

インドの宗教では、「殺すな」（アヒンサー）が教えの基本となっている。仏教の五戒でも不殺生戒が筆頭であり、インド独立の父、マハトマ・ガンディー（1869-1948）も、非暴力主義を貫いていた。ところが、自殺は色々な形で表れてくる。キリスト教では、絶対に認められない自殺が、なぜ多く現れてくるのか。そこにインド思想の特質が潜んでいるように私には思われる。

ブッダより 20 歳年下に、ジャイナ教の教祖マハーヴィーラ（大雄・大勇 BC444? - 372?）という人がおり、彼が定める掟は、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、無所有（持つな）であった。「無所有」だけが仏教と異なり（仏教では、不飲酒戒）、ジャイナ教では、何も所有しない。持たないどころか、捨てる。妻子を捨て、家を捨て、欲望を捨て、迷いを捨てる。そして、すべてを捨て去ったとき、「私には何も無い。私は何ものにも属さず、私は何ものにも束縛されない」という「悟り」が開けるとされる。仏教でも、頭陀（捨てる）は重要であり、十大弟子のマハーカッサパ（摩訶迦葉）は頭陀第一と讃えられているが、ジャイナ教では、着ている服まで捨ててしまう。マハーヴィーラは、修行に入った 2 年目の冬に、すべての衣服を脱ぎ捨てて、丸裸の姿になって各地を歩いて回ったとされる。生い茂る草に身を切られ、冬の寒さ、夏の蚊や毒虫に襲われながら、しかも、行く先々の村では、犬をけしかけられ、咬みつかれ、石を投げつけられ、棒で叩かれるという迫害を受けながらも、彼は一切の反抗をせず、まるで「戦場における象のように」耐えたと伝えられている。

「地・水・火・風、草木や穀物、動物は、それぞれに生命ある生き物である。これが、六生類と呼ばれるもので、これですべてである。あらゆる手段を尽くして、このことについて考えなさい。すべてのものは、苦しむことを憎んでいる。だから、すべてのものを殺してはならない。何ものも決して殺さないこと、これこそが「知ある人」（マハーヴィーラ）の教えの中で最も重要なものである。そして、不殺生の教えは、これに尽きていると知りなさい」（『スーヤガダンガ』）

マハーヴィーラは、同時期を生きた古代ギリシアのデモクリトス（BC460? - 370?）のアトム（分割されないもの）と同様に、世界は、地・水・火・風（四大）で出来ているとする、東洋で最初の原子論者である。しかし、デモクリトスと違って、マハーヴィーラは、さらに、そのすべてに生命があるとする。そして、それを殺すなどと言う。大地に命があるから踏みつけてはいけない、水に命があるから飲んではいけない、火に命があるから火を使ってはいけない、風に命があるから空気を吸ってはいけないと。

この教えを守ったら、生きてはいけない。マハーヴィーラ自身も、布教のために各地を歩き回り、水を飲み、食事を摂り、息もしていた（ただし、食事は何日間に 1 回、呼吸は 1 分間に 1 回程度だったとされている）。

「殺すな」という教えを最大限に尊重して生きた人が、マハーヴィーラであった。

ブッダも、不邪淫戒を説き、性交するなど説く。もし、人類全員が、この教えを守ったら、100 年くらいで地上から人類だけが消滅する。それが「清浄」な世界だと言う。しかし、マハーヴィーラは、もっと極端で、水を飲むな、息もするな、すぐ滅びてしまえと言うのである。

殺すな、生命を大切に、と言いながら、自らを殺す道に進む。ブッダも、「寂滅為楽」、滅びることを楽しみ

とせよと説く。

そうした矛盾は、BC800 年頃に成立した世界最古の詩集『リグ・ヴェーダ』(知の讃歌)にも見ることがができる。そこでは、「あなたは、それだ」(You are It.)、「私はブラフマンだ」(I am God.)と言ったり、ブラフマンは、「天よりも、空よりも、大地よりも大きい」、そして、「黍つぶよりも小さい」と言われたりする。こうした不可解さを、どのように受け止めたら良いのであろうか。

6. 天台大師智顛



天台大師智顛 (知者大師)

天台山・国清寺、智者塔院 (眞覺寺) 蔵

不明)によれば、有と無を超えたものとされる。例えるなら、青空のようなものである。雲一つない空、それは確かに私たちの上に広がっている。しかし、具体的に何かがあるかといえ、何も無い。有るけど無い、無いけど有る。それが、「空」ということだろう。

あるいは、「一念三千」、一つの念おもいにも、三千世界が、すべて含まれているとも智顛は語る。

三千世界とは、ヴァスヴァンドゥー (世親 5 世紀頃) の『阿毘達磨俱舍論』によれば、世界の中心にシュメール山 (須弥山) が聳え立ち、その頂上に天 (神) が住んでいる。その山を取り囲むように海が広がり、その海を取り囲むように山が聳えているが、そこに、阿修羅が住んでいる。その外にも海と山が重なるように広がり、一番外側の海の南方には、三角形の南閻浮提州、つまりインド半島が浮かび、人と畜生 (動物) が住んでいる。他の東・西・北の島には、餓鬼と畜生が住んでおり、そして、その海をさらに鉄圍山てつゐさんが取り囲んでおり、その外には寒冷地獄が、南閻浮提州の地下には炎熱地獄があるという九山八海の世界が、古代インド人にとっての世界像であった。この宇宙を 1000 個集めると、小千世界となり、小千世界を 1000 個集めると中千世界、中千世界を 1000 個集めると大千世界となる。そして、このすべてを併せて三千世界、もしくは、大三千世界と呼んでいる。

智顛は、たった一つの思いにも、こうした広大な宇宙が込められていると言うのである。さらに彼は、「一即多」とも言う。

古代インドの『リグ・ヴェーダ』においても、神は最大にして最小、と歌われていたが、1 は無限、無限は 1 とされる。常識的に考えれば、これでは、 $1 + 1 = 2$ ではなく、3でも、4でも、何でも良いということになってしまうが、まさにそうした世界こそがインド的世界、仏教の世界なのである。それを、道元 (1200-53) は、「人のさとりをうる、水に月のやどるがごとし。月ぬれず、水やぶれず。ひろくおほきなるひかりにてあれど、尺寸の水にやどり、全月も弥天も、くさ

の露にもやどり、一滴の水にもやどる」『正法眼蔵』現成公按)と、一滴の露に全天の星空が映っている姿として美し

こうした問題に真正面から取り組んだ、最初の中国人が智顛であった。

古代中国では、中華思想が当然であり、周辺の諸地域は、東夷・西戎・南蛮・北狄と、すべて野蛮人であった。ちょうど、古代ギリシア人にとって自分たち以外は、バルバロイ (聞きにくい言葉話す人) であつたり、古代インド人にとっての他地域の人が、餓鬼 (食欲と性欲しかない人) とされたようなものである。

そうした中国人が初めて出会った<他者>、それが、仏教であった。現代風に言えば、カルチャーショックである。

智顛の講義を、弟子の灌頂かんじょうが記録した『摩訶止観』には、インド的矛盾と向かい合った結果として生まれてきた言葉が、多く著されている。例えば、「煩惱即菩提、菩提即煩惱」。煩惱は菩提であり、菩提は煩惱である。あるいは、「迷悟一如」。迷いは悟り、悟りは迷い。迷いと悟りは、二つで一つのようなものとされる。

智顛がブッダの般若時の教えとする『般若心経』でも、「色即是空、空即是色」と、色 (存在するもの) は「空」(真理) であり、真理は存在するとされる。「空」とは、ナーガールジュナ (龍樹・龍猛 生没年



く表現し、大宇宙と小宇宙の相即を語っている。

道元は、比叡山や三井寺で修行しているが、鎌倉新仏教宗祖たちは、道元だけでなく、彼の師であった栄西（1141—1215）も、法然（1133—1212）、親鸞（1173—1262）、

天台山；浙江省東部・天台県北方 2 kmにある靈山



天台山 国清寺

日蓮（122—82）も比叡山で学んでおり、智顛の教えは、最澄を通じて日本仏教に深く浸透しているのである。例えば法然、親鸞、一遍らが説く「南無阿弥陀仏」という称名念仏や、日蓮が説く「南無妙法蓮華経」という御題目は、『法華経』方便において、「もし散乱の心で塔や仏殿の中に入り、一声、南無仏と称えた人も、みなすでに成仏した」と、心を込めず、ただ「南無仏」と唱えるだけでも救われるとされることを拡大したものと考えることもできるだろう。

7. 理事無礙

智顛から、およそ百年後の法蔵（643—712）が大成した華嚴宗では、四法界説を説いており、宗教段階を以下のように分けている。

事法界	日常的な経験世界（俗）
理法界	唯識論。法相宗。玄奘三蔵。（聖）
理事無礙法界	天台宗。智顛。（聖＝俗、俗＝聖）
事々無礙法界	華嚴宗。法蔵。（俗＝俗）

事法界は、宗教心のない段階で、日常的な生活に明け暮れている世界。理法界は、玄奘三蔵がインドから持ち帰った唯識論で、現象世界は、感覚・知覚（眼識・耳識・鼻識・舌識・身

識・意識・末那識・阿頼耶識の八識）が生み出したものに過ぎないとする世界。理事無礙法界は、智顛が著した

インド的矛盾の世界。事々無礙法界は、「花は紅、柳は緑」とか「眼横鼻直」と表現され、あるものは、あるがままにある、それが、すべてだとする、理が消滅した世界になる。

事々無礙法界では、理が消滅しているため、世界には、何の必然性も、原理やルールも存在しないことになってしまう。それが、縁起の世界。「諸法無自性、因縁生起」、すべてのものは本質を持たない、関係が立ち

現わさせる世界である。すべては、偶然に引き起こされるため、この世界は、多元的宇宙となる。例えば、賢治が散歩をしている時、人に出会ったとしたら、その人には、仕事か何か用事がある、出会わなかったかもしれない。道端に花を見つけたとしたら、その花は、まだ咲いていなかったかもしれないし、もう散っていたかもしれない。空を見上げたときの雲の形も違っていただかもしれない。今、ここで、私が体験している世界とは違う、こうであったかもしれない、ああであったかもしれないという可能性の世界は無数に存在する。それを目に見えるものにしてるのが、奈良の大仏。日本華嚴宗の総本山は東大寺であるが、毘盧遮那仏の座っている蓮華座の蓮の葉の一枚には、三千世界が込められているとされる。すべての可能性の世界が、そこに存在する。だから、大仏は大きくなければならないのである。

四法界説は、華嚴宗が他の宗派より優秀だということを主張するために立てられたと考えられるが、方便品には「諸法実相」、すべての存在は真実の姿だと語られており、事法界で日々の生活に追われながら暮らしている人も、玄奘も、智顛も、法蔵も優劣を決めることはできない。順番はつけられないのである。

実際、賢治が『よだかの星』のラストで、よだかが、「落ちてゐるのか、のぼってゐるのか、さかきになってゐるのか、上



を向いてあるのかも」分からなくなってしまうと、いつの間にか、星になって燃えているという転換や、「いちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなっていないやうなのが、いちばんえらい」(『どんぐりと山猫』)という逆転、「善なり善にあらず、人類最大の幸福、人類最大の不幸。謹みて帰命し奉る、妙法蓮華経。南無妙法蓮華経」(1919 年頃の保阪嘉内あて書簡)という反対の一致は、理事無礙的であるが、彼の心象スケッチは、彼の見たままを、彼の心に浮かんだままを描いており、その点では、事々無礙的である。賢治が、もっと長生きしていたら、さらにその先の世界を描いていたかもしれないと思われるが、それは不可能な願いである。合掌。

講演司会 及川静衛 幹事

<質疑応答>

1. <結論として何を言いたかったのかわからない>

「法華経みたいなお経を簡単に説明できるものではない」ということを弁解します。仏教の専門でないので分かつちやいないが、わかっている範囲でお話させていただいたのでご了承ください。

2. <補 足>

延暦寺におります横山です。ほんとに今、藤本先生のおっしゃった通り、法華経は何を教えているか?・・・、私も上手な説明はなかなか難しい。先ほど法要が終わってお話させていただいた通り、なぜ賢治が「寿量品」に心を打たれたのかというと、全く宇宙観なんです。あの時代に宇宙観を理解できた日本人は数少ないと思う。お経が日本に伝わったのは 1300～1400 年前ですが、その前は神道の世界、八百万(やおろず)の神の世界観で、これと仏教の世界観とは観点が全く違っている。今、先生がおっしゃった中華思想・世界の中心は中国だ、という教えが日本に入ってきた。これにも対抗しなければならないという捉え方があったと思う。サンスクリット語から漢訳された仏教の真意も若干違ってくる。



横山照泰師；延暦寺一山護心院住職

インドという国は、インダス文明を原点に持ち、そこにアリア人が入って来てインド最古の聖典とされている「リグ・ヴェーダ」を伝えた。その中から「梵我一如(ぼんがいちによ、ウパニシャッド哲学)」が発展し、一元論的哲学思想を体系化していくのです。

仏教はこの影響を受けるのですが「表裏一体」、すなわち一つの事物を取り上げてみた場合、通常別々の物を捉えるのも、実は一つのものであると考えるのです。仏教思想で「生死一如(しょうじいちによ)」という。生も死も別のように捉えるが、相対する概念が実は生命(いのち)だと捉えるのが仏教の立場なのです。

「死んだら終いやで!・・・」という考え方は、人体・生命を物として捉えてしまう現代人の生命観だからです。私は、「死んだら終い!・・・」とは到底考えられないのです。現に亡くなった人の思いが、触れ合った人々の心の中に記憶・想い出として残り、その心が発動するではないですか。賢治の捉えた法華経も、まさに、三千大千世界の宇宙に遍満し、死後の世界をさまよってまた再生するという物語(ものがたり)だと思います。

以上

(本稿は平成 30 年(2018)9 月 21 日の宮沢賢治 86 回忌における記念講演での講演録です)

発行代表者 関西岩手県人会 鎌田龍児 岩手県大阪事務所内 (Tel & Fax 06-6344-5969)
〒530-0001 大阪市北区梅田 1 丁目 3 番 1-900 大阪駅前第 1 ビル 9 階

編集代表者 関西宮沢賢治の会 深田 稔 関西岩手県人会内